

書評：パウル・ティリッヒ『地の基は震え動く』（茂 洋訳）新教出版社

芦名定道（あしな・さだみち＝京都大学教授）

神学者ティリッヒがユニオン神学校で行った説教を収録した三つの説教集は、長い間、現代人の心に訴える説教として多くの読者に読み続けられてきた。これまで幾度か翻訳されてきたにも拘わらず、最近は入手困難な状況にあった最初の説教集『地の基が震え動く』（一九四八年）が、このたび新しい翻訳者の手で装いも新たに出版されたことを、ティリッヒ説教集の一愛読者として喜びたい。今回の新訳は、ティリッヒ研究者として著名で、しかもご自身が説教者としても知られる翻訳者の手によるものであり、格調高い名訳である。

ティリッヒの説教は、聖書の真理を困難な現実の中に生きる現代人の心に触れるメッセージとして届ける内容であり、ぜひ多くの方々に実際に手にとって味わっていただきたい。ここでは、この説教集の一端を紹介することにしよう。

ティリッヒの説教は、教会に所属するキリスト者だけでなく、むしろキリスト教の外部の現代人を意識してなされている点に特徴がある。預言者の時代と同様に、地の基が震え動く現代を生きるわたしたちに対して、救いと希望の源泉をその逆説性において語り指し示すこと、これがこの説教集を通底するテーマである。「この大地と人類、植物と動物すべてが、避けることのできない破局によって脅かされ」（一六頁）、わたしたちは「これまでのほぼ全世代よりも深く悪の神秘をのぞき込むようになった」（二三五頁）。現代の日本人も、環境危機から格差社会まで、様々な将来不安を生きている。「それが私たちの状況です」（238）。この現代人が抱える問いに対して、震え動く基のさらに深み（＝無限で無尽蔵な実存の深み）にある「基の基」、つまり神を指し示すこと、これがティリッヒが伝えようとする聖書のメッセージにほかならない。もちろん、このメッセージはわたしたちの一切の期待を超えて逆説的な仕方においてのみ接近可能なものであり、ティリッヒは、聖書の言葉を「一語一語たどりながら」、この深みへの道を掘り下げて行く。そこに、あなたがたは恵みにおいて「受け容れられている事実をただ受け容れよ！」（二一一頁）との希望の言葉が、そして「宗教の重荷」、律法の「軛」（一二八頁）からの解放の言葉が語られる。ティリッヒの説教がわたしたちの心に届くのは、彼がわたしたちと同じ問いを抱え、同じ答えを共有しようと努めているからなのである（「問いと答え」）。

ティリッヒの説教は、しばしば難解とも言われるティリッヒ神学の入門として読むことができる。書評者自身も長らくティリッヒ研究を続けている一人であるが、最初に読んだティリッヒの著作は、本書の翻訳者が訳された説教集『永遠の今』（新教出版社）であった。ティリッヒの説教に見られた「問いと答え」という構造は、実は、ティリッヒ神学の基本構造にほかならない。その他に、神、摂理、罪、恵みなどをめぐるティリッヒ独特の神学的解釈が説教の随所に現れている。

たとえば、本書に収録された二番目の説教「私たちは二つの秩序に住む」においては、ティリッヒの名著『組織神学』（全三巻、新教出版社）全体で展開される神学的人間学（有限性、罪＝疎外、両義性によって構成される人間存在）が、「『肉なる者は皆、草に等しい。草は枯れる』（イザヤ 40・7）と言われる有限性」、「私たちが受ける罪のすべてに倍する」と言われる罪」（三二頁）、そして「人間の偉大さの完全な崩壊」（三五頁）——これはほかの説教で「偉大と悲劇」の両義性とも言われる——という仕方で、聖書に即して描き出されている。

現代のキリスト者は、「イエスはキリストである」（一八九頁）というキリスト教の中心的メッセージに慣れきっており、その驚くべき逆説的恵みを忘れてしまっている。このメッセージの衝撃を現代において回復することが、ティリッヒ神学の意図だったのである。

わたしたちは、この説教集から、このティリッヒ神学の核心を読み取ることができるだろう。